片田舎の小さなお祭りで出会った青年グループとＯＬグループが激しい乱交

暑かった夏もそろそろ終わりの片田舎の駅前。

地元主催の小さなお祭りが開かれていた。

このお祭りは例年、この時期に欠かさず行われる恒例のイベントで地元住民の楽しみの一つとなっていた。

駐車場の大半のスペースは屋台や催しものの場となっており、メインは音楽や芸が行われる舞台である。

広い駅前の駐車場の隅に黒いスクーターが数台停まっていた。

屋台で買った花火やお笑いなどの舞台を楽しむ青年グループのスクーターであった。

全員で５人。皆、揃って派手な色に髪を染めている。

学生生活最後の夏である。少し不良も気取っているが、根っこは純粋。まだ

まだ少年である。

大人への足跡を一歩ずつ残し大人へと成長している過渡期の青年たちは性欲も大人顔負け。いや、圧倒的に大人より多い。

ネットのポルノサイトを見ては、皆で誰かの家に集まり、ビンビンにはち切れそうになったペニスをしごき合う。もちろん家でも個々に毎晩大変なことになっている。青年の一人タカユキが言うには、布団の上が大きめのバケツ（5リットルは入る）に擦り切れまで水を溜め、全てぶちまけたほどに精液が一晩で出たという話も出たほどだ。

青年たちの陰嚢に含まれた二つの巨大な睾丸には、無尽蔵の白いトロトロ液が詰まっているのだ。

「あぁー、、、、、セックスがしてぇなぁ」

それが青年たちの口癖。しかしまだ全員女性というものを肌で体験したことのない童貞。だからこそそれは楽しい学生生活の最後の望みとも言えるものであった。

一方、とりとめもない会話をしながらほんの少しせわしない顔で駅から降りてきたのはＯＬグループ。総勢６人。皆、仕事終わりである。軽い気晴らしといった感じでこの祭りにやってきた。最後の夏をはしゃぐ青年グループとは少し目的というか色合いは異なっていた。

ＯＬたちはと言うと、青年たちとは真逆でセックスの経験が豊富。

彼氏とのラブラブタイムは夜な夜な行われていて、膣はもう何兆回彼氏に突かれたか分からないほどになっている。若いため元の形状を保ってはいるが、通常ならもうガバガバになってしまうほどにとにかくピストンをし続ける日々だ。友人たちとの乱交パーティーを繰り返しているＯＬもいる。いわゆるセックスの味を若いうちに知ってしまい、ビッチ、盛り猫、好き者・・・になってしまった女たちである。

青年グループと経験豊富な女性グループ・・・。

年下が特段好みということはなかったが、セックスは既に極めているので、まだ知らない男の子に教えるということも面白そうだという価値観もＯＬたちにはあった。まだやり残していることが山ほどあった。

その頃、白いライトと幕間の音楽でこの夜の祭り一番目立っている舞台では遠くから招待されたちょっと有名な都会で普段は活動している芸人たちが客た

ちを笑わせていた。芸の途中、流れで舞台を下り、客たちの座るイスまで行って笑わせる芸人２人組。

花火をやめて見入る青年たちと同様に足を止めるＯＬたち。

唇に指を持っていき、

「へぇ・・・・なかなか面白いじゃんっ」

ＯＬの一人、ユキナは隣にいるカエにつぶやいた。

―――――― 体験版は以上になります。――――――――――――――――――――――――